

健育会グループ 平成30年度 医師研修会が行われました

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



2018年10月27日（土）ホテルオークラ東京（東京都港区）において健育会グループ平成30年度医師研修会が行われました。

会の冒頭には私から、今回の研修の目的について以下のような話をしました。

医師研修会では、ここ数年、終末期医療の問題を取り上げています。一昨年は尊厳死協会の副理事長を務められている長尾和宏先生に、昨年はご夫婦で終末期高齢者の医療に取り組まれている宮本先生ご夫妻にご講演いただきました。今年は、箕岡医院 院長 で日本臨床倫理学会 理事である箕岡真子先生に『「終末期医療の倫理」の基礎と「DNARの倫理」～アドバンスケアプランニングの重要性～』について講演を賜ります。



健育会グループでは医師の役割を「医療における倫理の番人」「医療チームのリーダー」と規定しています。言うまでもなく、医師は患者さんに信頼されなければなりません。

終末期医療だけに留まらず、高齢の患者さんの病状が急変したときに、侵襲的な処置をするのか、それとも非侵襲的な処置で診ていくのか。もちろん患者さんご本人やご家族の意向を尊重すべきですが、多くの場合「どうしたらいいのか、わからない」と言うのが、患者さん・ご家族の思いではないでしょうか。そのような時に医者は、リーダーシップをとって患者さんにとって一番いい方法へと導いていかなければならないと考えますし、そのためには人間力と高い倫理観が必要だと考えています。今日の研修会においても、さらに皆さんの魂に磨きをかけていただきたいと思います。



私から以上のような話をした後、箕岡医院 院長 箕岡真子先生に『「終末期医療の倫理」の基礎と「DNARの倫理」～アドバンスケアプランニングの重要性～』という演題で、ご講演を賜りました。座長については健育会グループ 岩尾副理事長が務めました。



箕岡先生のご講演では、終末期医療を現場で考えていくための様々な学問的な基礎についてお話しいただきました。

興味深かったのは、人生の最終段階をどのように過ごしたいかを考える「アドバンスケアプランニング（ACP）」の始まりは、机上の議論からではなく、現場で医師と患者さんが今後の治療・療養について深い対話を続ける中からであったというお話です。

健育会グループでも、このように終末期医療の倫理の発展のプロセスの中で現場で生まれたACPを活用し、患者さんご家族、医師医療関係者の中での対話を深めて患者さんと価値観を共有して行くことができればと思います。そこで必要であるのが前述の「医師の高い倫理観」と「人間力」です。医師にそのような基盤があってこそ、患者さんやご家族は我々を信頼して心を開いてくださるのだと考えています。



私の理想は、健育会グループに入院する患者さんやご家族に「健育会グループの病院で看取ってもらいたい」「健育会グループの主治医にお任せします」と言っていただける病院グループになっていくべきだと考えています。なぜなら、それが患者さんやご家族と究極の信頼関係が築けた証だと考えているからです。健育会グループの医師には、患者さんやご家族との真の信頼関係を築き、「導くこと」ができる医師になって欲しいと希望しています。



また、大泉学園複合施設の院長兼施設長の酒向先生が質疑応答の中で、看取りの経験が無い介護職とリハビリ職に対する終末期医療に対する教育について触れていました。これについても、各病院で医師がリーダーシップを取り、終末期医療の倫理について各職種と考える機会を是非持って欲しいと思いますし、グループとしても教育の場を作っていければと感じました。



そしてその後は、医師研修会の恒例、ご家族のみなさんも招いた懇親会を行いました。乾杯のご挨拶は、湘南慶育病院の鈴木院長に音頭をとっていただきました。

鈴木院長からは乾杯のご発声の前に、以下のようなご挨拶をいただきました。

私は今年の4月から健育会に入らせていただきました。3月まで慶應義塾大学医学部で学生を教えており、急性期医療の場に身を置いてきました。これまで病気が発生した後、いかに正確に診断をつけて、適切な治療を施し、容態を安定させるかというところまでを行ってきました。しかしその後の療養に関する医学教育は、私はまだまだであったと、健育会グループで働くようになってから実感しております。現在、終末期医療や慢性期医療について、猛勉強中です。日々カンファレンスや回診をしておりますと、いわゆる終末期、そしてCPAの問題にも、日々直面しております。今日の箕岡先生のご講演では、この半年間に病棟で患者さんに接してきた経験から、非常に直感的に伝わるものがありました。

健育会グループでは、医師だけでなくコ・メディカルに向けても色々とアクティビティがあり、いかに患者さんの目線で医療を施して行くかと言うことを日々勉強させていただいています。このような研修会を企画していただけるのも、我々医師にとってありがたいことです。非常に素晴らしい医療法人であると実感しております。これからもここに身を置かせていただく限り、グループの発展に寄与して行きたいと考えております。よろしくお願いいたします。



会の途中には、この1年に健育会グループに入職した医師の紹介が行われました。今年は湘南慶育病院を中心に、全体で15名の新しい医師にご挨拶をいただきました。



中締めのご挨拶として東邦大学 教授の長谷川先生から以下のような中締めのご挨拶をいただきました。

昨日、メディカルディレクターミーティングが本部で行われました。このような院長の集まりについては、これまで形式的な報告で終わることも多かったのですが、ここ何回かは実質的な議論が行われ、医療の質の高まりを感じています。特に昨日のミーティングでは、健育会グループにおいてACPをどうするかと言うような白熱した議論が行われました。今日の箕岡先生のお話を受けて、またさらにこの議論を深めて行く方向になっていくと思います。

ここにいらっしゃる医師の先生方は、急性期病院を経て健育会グループにご参画していただいている先生が多いと思うのですが、是非その経験や知見を慢性期医療にも生かした形で議論に参加していただきたいと思ひますし、その結果を日々の活動に反映していただきたいと考えています。



健育会グループの今年のスローガンは「今、心を一つにビジョン達成を目指そう！」であり、私は年頭所感の中で「新しく仲間に加わった職員の皆さんと共に、健育会グループの伝統・文化を共有し、「新しい風」を創っていきたい」と職員の皆さんに話しました。

鈴木先生をはじめとした急性期医療で活躍された先生が健育会に入職していただいで活躍いただいていることや、また長谷川先生の中締めの中でお話いただいた、グループの質の高まりについても「新しい風」の一部だと感じました。健育会グループの医療専門職のリーダーである医師の皆さんには、終末期医療においてもリーダーシップを発揮していただき、グループに是非とも「新しい風」を起こしてほしいと考えています。